

頁	行	誤	正
iii	まえがき 本文下から5行目	岡山大学資源生物科学研究所の	岡山大学資源 植物 科学研究所の
4	コラム 1.1 右段上から 5~20行目	<p>トマト野生種で自家不和合性の雌ずい側因子となっている RNA 分解酵素(S-RNase)は、栽培種では酵素活性中心で機能しているヒスチジン残基がアスパラギン残基に変化することで酵素活性を失い、自家和合性を示す。もちろん、すべての種子・果実を食する作物で他殖性が失われているわけではなく、例えば、バラ科果樹のリンゴ、ナシ、オウトウなどは自家不和合性を示すことから、和合組み合わせとなる別品種の花粉親が必要となる。同様に、葉・根を食用とするキャベツ・ダイコンも自家不和合性形質を有している。このことは、キャベツ・ダイコンの栽培には影響しないが、自家不和合性の形質を有効に利用し、経済的な F₁ 雑種採種（第5章 5.3.2 項参照）体系が構築されている。</p>	<p>トマト近縁野生種 (<i>Solanum peruvianum</i> syn. <i>Lycopersicon peruvianum</i>) の中には、自家不和合性と自家和合性を示す個体が存在する。自家不和合性の雌ずい因子である RNA 分解酵素 (S-RNase) 遺伝子の解析から、活性中心のヒスチジン残基のアスパラギン残基への変化が自家和合性の原因であることが示された。もちろん、すべての種子・果実を食する作物で他殖性が失われているわけではなく、例えば、バラ科果樹のリンゴ・ナシ・オウトウなどは自家不和合性を示すため、和合組み合わせとなる別品種の花粉親が必要となる。一方、アブラナ科作物のキャベツ・ダイコンも自家不和合性であるが、葉・根を食用とするため栽培には影響しない。現在では、経済的な F₁ 雑種採種（第5章 5.3.2 項参照）体系に自家不和合性形質が利用されている。</p>
18	コラム 1.8 左段 9~16行目	<p>彼女はその著書の中で、「農業というモノカルチャー（特定の作物だけを作るという偏った形態のこと）は自然生態系の中での種を保持するバランスを破壊する危険を有するものである」と説く一方で、DDT などの合成殺虫剤を全面否定しているわけではない。DDT が感染症抑制に絶大な効力を発揮した事実を認識する重要性も指摘している。60年後の今日にも…</p>	<p>彼女はその著書の中で、「1種類の作物だけを栽培する現代農業農業は自然生態系の中での種を保持するバランスを破壊する危険を有するものである」と説く一方で、合成殺虫剤を全面否定しているわけではない。DDT が感染症抑制に絶大な効力を発揮した事実を認識する重要性も指摘している。一部には後に否定される内容も含まれているが、60年後の今日にも…</p>
31	図 2.2(a)		「胚」(左の赤丸)を「根」に修正
53	コラム 3.1 右段下から 2~1行目	光合成細菌は緑色ではない。	光合成細菌は 必ずしも 緑色ではない。
65	下から5行目	(第4章図 4.23 参照)。	(第4章図 4.30 参照)。

67	図 3.16 説明文 下から 2 行目	反応 1 の正しい収支は $3 \text{ RuBP} + 2 \text{ O}_2 + \text{CO}_2 + \text{H}_2\text{O} \rightarrow 4 \text{ PGA}$ となる。	反応 1 の正しい収支は $3 \text{ RuBP} + 2 \text{ O}_2 + \text{CO}_2 + \text{H}_2\text{O} \rightarrow 4 \text{ PGA} + 2\text{-ホスホグリコール酸}$ となる。
72	上から 6 行目	3 つの型*37 がある。	3 つの型*41 がある。
92	コラム 3.9 右段 3~4 行目	Rubisco も C4 植物の中で特に高比活性型へと進化しているといわれている。	Rubisco も C4 植物の中で特に高比活性型へと進化している。
103	図 4.8		「NO ₃ ⁻ 」から「大気中の窒素」へ向かう矢印の頭（左の赤丸）を削除 ※「大気中の窒素」から「NO ₃ ⁻ 」への一方のみ
104	上から 6, 7 行目	低濃度域ではたらく高親和性 NRT1 と高濃度域ではたらく低親和性 NRT2 が	低濃度域ではたらく高親和性 NRT2 と高濃度域ではたらく低親和性 NRT1 が
127	上から 2 行目	(sugar efflux protein)	(sugar efflux transporter)
131	上から 1 行目 3	(第 9 章コラム 9.3 参照)	(籾数 に関しては第 9 章コラム 9.7 参照)
154	コラム 5.6 左段下から 2 行目 ~ 右段 1 行目	放射線照射により、雌ずい側 S 因子である S-RNase 遺伝子を欠損させた自家和合性のナシ品種「おさ二十世紀」が育成されているが、	枝変わりにより、雌ずい側 S 因子である S-RNase 遺伝子が欠損した自家和合性のナシ品種「おさ二十世紀」が見いだされているが、
	欄外注*44 最後の文章	現在も継続して採種が行われている。	現在も継続して F ₁ 品種種子の採種が行われている。
164	表 6.1 最下段	雑種第 1 代を F ₁ , 雑種第 2 代を F ₂ と	雑種第一代を F ₁ , 雑種第二代を F ₂ と
174	図 6.5		ヒトツブコムギ、クサビコムギ、パンコムギの各ゲノム右端の染色体が上下で融合しているが（左の赤矢印）、正しくはいずれも、染色体の上下がそれぞれ分かれ、別の染色体になる。
218	コラム 9.1 左段 下から 2~1 行目	コムギやイネの生産量は約 2 倍に増加した。イネへの短稈性付与の原因は、	コムギやイネの収量は 2 倍以上に増加した（第 1 章図 1.10 参照）。イネへの短稈性付与の原因は、
232	コラム 9.7 左段 下から 4 行目	収量の違いを決めるもっとも強い遺伝的原因	籾数の違いを決めるもっとも強い遺伝的原因
	コラム 9.7 右段 上から 4 行目	増収に関わる遺伝子を	増収に直接関わる収量構成要素の遺伝子を

249	図 10.7 右側の図のピンク 色の丸 (2箇所)	fig	fig (アイ i ではなくエル l)
253	右段 [第 4 章 植物の 栄養 に関して] の最後の書籍	・米山忠克, 長谷川 功, 関本 均 編, 新植物 栄養・肥科学 改訂版, 朝倉書店 (2022)	・米山忠克, 長谷川 功, 関本 均 編, 新植物栄養・ 肥科学 改訂版, 朝倉書店 (2023) ※2023 年 4 月 5 日発売
258	作物名索引	ウメ (Japanese apricot, <i>Prunus mume</i> Sieb.)	ウメ (Japanese apricot, <i>Prunus mume</i> Siebold et Zuccarini)
		モモ (peach, <i>Prunus persica</i> Sieb.)	モモ (peach, <i>Prunus persica</i> Siebold et Zuccarini)

[2023 年 6 月 7 日作成]